昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(3)

――神戸篇(後篇)陳舜臣――

福　田　義　昭

キーワード：日本文学，陳舜臣，神戸，ムスリム，タタール人

1．はじめに

本稿は，先に筆者が発表した二論文の続篇である。これらの論文では，昭和戦前期から終戦直後にかけて日本社会に暮らしていた外国人ムスリム，いわゆるオールドカマー・ムスリムが日本の文学作品のなかでどのように表象されているかを分析している。前々稿では東京と朝鮮，前稿では神戸を主な舞台とする諸作品を取り上げた[1]。本稿は「神戸篇（後篇）」として，紙幅の関係から前稿で扱えなかった陳舜臣（1924－2015）について論じる。

2．神戸から世界へ

旧稿で示したように，昭和初期の在日外国人ムスリムについて書き残したり，彼らを作中人物として用いたりした作家は一人や二人に限られるわけではない。意外に多くの作家が彼らの痕跡を自作のなかに書きとどめている。しかし，在日ムスリムの民族性や歴史性を明確に認識し，意識的にそれらを作中に取り込んでいる点で，陳舜臣にならぶ作家はいないだろう。

陳はデビュー作『枯草の根』（1961）以来，推理小説作家として活躍した[2]。同時に歴史小説作家でもあり，『阿片戦争』（1967）や『耶律楚材』（1993－1994）など，中国を中心に，広くユーラシア史に題材を求めた作品を数多く残している。小説だけでなく，歴史エッセイの類も多い。イスラム史に関する造詣もあり，しばしばそれを著作のテーマや背景として利用している。

他方，陳には“神戸の作家”という顔がある。台湾人貿易商の子として神戸に生まれ育った彼は，職業作家となった後もこの街に住み続けた。20世紀を時代背景とする彼の作品において，物語は多く神戸を舞台に，もしくはその一部として展開する。また小説だけでなく，『神戸というまち』（1965）や『神戸 わがふるさと』（2003年）など，都市そのものに関するエッセイ（および短篇）集も刊行している。後者には「戦争も平和も，災害も繁栄も，私はいつも神戸とともに経験した。神戸のなかに私があり，私のなかに神戸がある」というように，自らと神戸の不可分性を印象的に語った言葉も見つかる[3]。

しかしながら，陳作品の魅力の一つは，そのように神戸を中心としつつも，物語が狭い領域に閉じられていないところにある。陳の神戸は何よりも海港都市としての神戸であり，背景にはほとんど常に国内外のさまざまな土地とのつながりが示唆される。たとえ舞台が神戸であっても，台湾，中国はもとより，東南アジアや欧米各国，ロシア，インドなど，世界中からやってきた人々が登場する。「西洋人」に偏ることはない。「枯葉のダキメ」（1982）のように，「パルシー」（インドのゾロアスター教徒）が登場する作品すらある[4]。作家自身が植民地台湾の出自であり，大方の日本人とは異なる視点からこの都市がとらえられていたことがわかる。日本語で書かれ，日本人ももちろん数多く登場するが，決して単なる日本人の物語に収斂しない

ところが陳作品の大きな特徴だと言えよう。

以上のように，概要を見るだけでも，陳の作品に神戸のムスリムが登場して何ら不思議ではないことが納得できるだろう。しかし，陳と在神ムスリム，あるいはイスラム世界とのあいだには，もっと具体的な関わりがある。それが彼の著作に影響を与えていることは疑いない。そこで次に，陳の自伝エッセイ『道半ば』(2003)その他を引きつつ，この作家がイスラム世界と遭遇した文脈をより詳しく探ってみることにしよう[5]。

3．イスラムとの出会い

陳舜臣は1924（大正13）年，日本の貿易商社に勤める台湾人の息子として神戸市生田区（現中央区）に生まれた。本籍は台北にあったが，1945年の日本敗戦まで，一時的な帰省をのぞいて台湾に帰ることはなく，神戸で育っている。

イスラムとの最初の出会いは近所に住んでいたタタール人の子供たちとの接触だったようである。そのことを陳はある対談のなかで次のように回顧している。

> 私はトルコには馴染みがありましてね，子供の頃から神戸には，トルコ人が沢山いたんですよ。トルコ人の中でもイディール・トルコといって，ものすごく，文化レベルの高い連中です。〔中略〕だからあの人たちと，子供の頃よく遊んでいましてね，お好み焼き屋へ行くんです。そしたらあの子らはね，豚あかんよォと言うわけ。豚食っちあゃいけないんですね。〔中略〕この油引くのも，おばはん豚せんといてよ，って言っているんですね。おかしなやっちゃなと思いましたね。だから私のトルコ体験というのは，子供っていうより，中学校の頃ですね[6]。

同じ思い出は，この対談の約20年前に刊行された夫人との共著『美味方丈記』(1973)でも語られている。

> その肉テン屋〔＝お好み焼き屋〕で幼年時代，紅毛碧眼の西洋人の子供をよく見かけました。そこに食べに来ているのですが，彼らはきまって，
> 「おばはん，ブタ肉入れたらあかんで，ウシにしてや」
> と注文したのです。
> 一人の例外もないので，これはどうも個人的な好き嫌いではなく，西洋人はブタ肉を食べない人種であろうかと，幼な心に思ったものであります。〔中略〕
> あとで知ったことですが，私たちが西洋人と思い込んでいたのは，じつはソ連領ウラル地方から亡命してきた，トルコ・タタール人の子供たちだったのです。彼らは回教徒なので，豚肉を食べてはいけないのでした[7]。

両者で語り方に少し違いがあるが，総合すると，以下のようになるだろう。「幼年時代」か「中学校の頃」かはさだかでない[8]。いずれにせよ，幼少年期に陳はすでにタタール人の子供たちに出会っていた。しかし，お好み焼き屋で見かける彼らがタタール人でありムスリムであるという認識はあとから得たものである。当時は「紅毛碧眼」ゆえに彼らを「西洋人」だと誤解していたらしいことがわかる[9]。ただ，豚肉を食べないことを奇妙に感じていた。旧稿で見たように，タタール人がその外見から「西洋人」やロシア人と混同された例は珍しくない。陳も最初はそのくらいの認識だった。また引用文を読むと，タタール人の子供たちが（白系ロシア人もそうだが）日本語を自由にあやつり，日本の庶民文化に溶け込んでいた様子もうかがえて興味深い。

こうした体験を重ねながら，陳は1941（昭和16）年に地元の第一神港商業学校を卒業し，大阪外国語学校（以下，「大阪外語」）の印度語部

に入学する[10]。印度語部を選んだのは「仏教に関心があったから」でもあるが[11]，タゴール（Rabindranath Tagore, 1861–1941）のベンガル語による小説『ゴーラ』（*Gora*, 1910）を英訳で読んだ影響もあったという[12]。とはいうものの，当時の印度語部で教授されていたのは，いわゆる「ヒンドスターニー（ヒンドゥスターニー）語」であった。これは『大阪外国語大学70年史』の表現を借りれば，「文字，語彙その他の性格から言ってむしろ今日のウルドゥー語に近いもの」（高橋明）である[13]。陳自身は『道半ば』のなかで「大阪外語の印度語はヒンディよりもウルドゥ（回教徒の用いるもの）に重点をおいていたので，イスラム的雰囲気が濃厚であった。そのころ，日本でも「回教世界」と「回教圏」という二種の雑誌が発行されていて，この方面について関心はかなり高かった」（113頁）と，1930年代後半以降の回教政策期における，いわゆる“回教ブーム”と関連づけながら回顧している。

陳をさらにイスラム圏に近づけた要素としてはペルシア語の学習が挙げられる。もともと大阪外語の印度語部は1922（大正11）年の開校当初から，二学年以降の兼修語として英語と並んでアラビア語を設けていた。1925（大正14）年にはこれにペルシア語が加えられ，アラビア語との選択になり，やがて1935（昭和10）３月にアラビア語のほうが廃止されてペルシア語だけが残った（ただし1940年４月に「亜剌比亜語部」新設）[14]。陳が在学した当時の印度語部主任教授は，のちにペルシア詩人サァディー（Saʿdī, 13c）の『ゴレスターン（薔薇園）』（*Golestān*）を訳すことになる澤英三で[15]，彼によるペルシア語の授業では，テキストとしても同作品が用いられたという[16]。

陳は熱心にペルシア語を勉強した。とりわけウマル・ハイヤーム（ʿUmar Khayyām, 1048－1131）の『ルバーイーヤート』（*Rubāʿīyyāt*）に対する愛着は，彼による日本語訳が2004（平成16）年に刊行されている現在，よく知られている[17]。この翻訳は，彼が80歳を迎える直前に偶然の成り行きから出版されることになったが，もとは青年時代になされたものである。戦後まもなく岩波文庫の小川亮作訳（1948）が出たため，「拙訳はもはや筐底に秘して，青春の日の思い出として封じこめるべきだと思った」らしく，それまで公にされなかった[18]。

陳の学生時代はまさに戦争と重なっていた。戦時下の措置によって彼は入学から二年半後の1943（昭和18）年秋に大阪外語を繰り上げ卒業し，そのまま，同校内に前年設置された西南亜細亜語研究所の助手となった。時局上の要請により外務省から補助金が出ていた同研究所の仕事は，アラビア語およびインド語の辞典を編纂することで，陳はもちろん後者に携わったのである[19]。

「ルバイヤートは私の青春とともにあった」と語る陳は，研究所に入ったころにこの書物の翻訳を始めたようである[20]。台湾人として戦時下の日本に暮らし，日常的に死について考えるなかで，陳は自分の境遇をペルシア詩人に重ねあわせていた。

> 戦争中の仕事なので，とくに忘れられない。死生観について，日常のことなので，いつも考えていた。同級生たちは大部分がすでに戦地へ行っていた。そのような状況のなかで私はルバイヤートを，辞書を片手に，それこそ精読していたのである[21]。

> 学生時代，私はオマルを乱世の詩人とみて，彼の四行詩を読んだ。乱世，しかも異民族王朝の下の，非行動的な学究として，なにか自分に近いものをかんじた[22]。

ただし，陳のペルシア文学に対する関心が，戦争という特異な状況下で生まれてその終結とともに失われるような一過性のもの，時局的関心に限られるものでなかったことは言うまでもない。たしかに，台湾人ゆえに，日本の敗戦に

よって日本国籍を失ったため，当時の環境では正式な「任官」ができず，インド語やペルシア語の研究者になる道は事実上絶たれたと，陳は繰り返し語っている[23]。だがそれでも，彼のペルシア語世界への憧憬や学究的な性分は変わらなかった。終戦の翌年に彼は一度日本を離れ，三年半を台湾で過ごしているが，「そのあいだも，ルバイヤートを写した紙片はつねに私の身辺にあった」という[24]。その後，日本に戻ったあとも父親の貿易業を手伝いながらペルシア語の学習を続け，「朝から夕方まで尺牘（せきとく）〔ここでは漢文による商業通信文〕を書いて，夜になると本を読んだり，ルバイヤートを試訳したりして，自分では学問の周辺にいるつもりだった」と述べている[25]。

陳のペルシア語世界への興味は生涯続いた。それは彼の膨大な著作のなかに頻繁に表われるペルシア的要素を見れば明らかだろう。一例を挙げれば，独創的な空想時代小説『桃源郷』（2001）にはウマル・ハイヤームその人を登場させ，自ら訳した四行詩を作中でも使っている[26]。また趣味として作っていた漢詩のなかには，大詩人ハーフィズ（14c）の廟を題材にした七言絶句なども含まれている[27]。これは1982年のイラン訪問を回顧しつつ詠んだ作品である。

こうした陳のペルシア語世界への関心は，西域や中央アジアなど，いわゆる「シルクロード」への関心と切り離して考えることはできない。それは仏教の故地であるインドやイスラム教の生誕地である中東などと，自らの故郷である東アジアを結ぶ道であった。これらの地域について書かれた陳のエッセイや関連する小説作品は枚挙にいとまがないほどで，その地域の歴史が彼にとっていかに重要なテーマであったかがわかる[28]。

「シルクロード」に対する彼の関心は商業学校時代にまでさかのぼる。大谷光瑞（1876－1948）が組織した大谷探検隊の影響による一種の「シルクロードブーム」のなか，東洋史家の宮崎市定（1901－95）の弟子にあたる「原山先生から，敦煌とかシルクロードの話をよく聞いていた」のだという[29]。その後，大阪外語から西南亜細亜語研究所へと進むわけだが，研究所時代の戦争末期の日々の読書について，陳は『道半ば』で次のように語っている。

> ペルシャ語をやったせいもあるが，西アジアに関心があり，シルクロードに惹かれていた。日本でもそのころシルクロード事始めという雰囲気があった。
>
> スウェン・ヘディンの探検記は主要なものは，ほとんど訳されていて，私はそれを読んでいた。実際には海も空もとざされて，どこへも行けないが，それだけに紀行の文章は，アームチェア・トラベラーにはたのしいことであった。
>
> 週に一度か二度は学校の焼け跡へ行き，書籍のにおいを嗅ぎ，輪読会で“Sino-Iranica”（シノ・イラニカ）からシルクロードの移り香をたのしんだ。また「禁」の字を貼られた，たとえばエドガー・スノーの“Red Star Over China”（中国の赤い星）などが読めた。またこれには日本が上海租界を接収する前に刊行された『西行漫記』がついていた。スノーの中国語訳本である。
>
> 私にとっては『シノ・イラニカ』も『西行漫記』も，新しい別世界であった。とくにそれを焦土を背景に読んだことが忘れられない。（142頁）

ヘディン（Sven Hedin, 1865-1952）の著作に関しては，陳は別の文章でも，戦中期に彼の本を読んでいかにシルクロードに憧れたかを語っている[30]。なかでも，甘粛出身の回族の軍閥指導者，馬仲英（1909？－39？）の新疆での反乱の様子を記した『馬仲英の逃亡』を繰り返し読んだと言い，「これがあるいは私の青春の一冊といってよいかもしれない」と記している[31]。馬仲英は陳の長篇小説『残糸の曲』（1971）な

どにも登場するが,『熱砂とまぼろし――シルクロード列伝』(1979)のヘディンに関する章にも彼のエピソードが挿入されている。

一方,上記回想に出てくる「学校の焼け跡」であるが,大阪市内にあった大阪外語(当時は「大阪外事専門学校」)の校舎が空襲で全焼したのは1945(昭和20)年3月13日夜から14日未明にかけてのことだった。その際,書庫など一部の施設が焼失を免れた[32]。それで,焼け残った書籍を読むことができたのである。『シノ・イラニカ』(1919)はアメリカで活躍したドイツ生まれの中国学者・人類学者ラウファー(Berthold Laufer, 1874 – 1934)の著書で,陳はこの書物について「中国とイラン,つまり西域との関係を,おもに言語学的に論考したもので,当時にあっては不急不要の研究といえた」と述べている[33]。いわゆる「回教政策」の一環としてのイスラム研究を含め,国策としてのアジア研究は細々となされていたものの,時局からすれば,すでに実用性が高いとはいえなかっただろう。アジア太平洋戦争末期の神戸を舞台にした短篇小説「三本松伝説」(1977)は陳の自伝的要素が散りばめられたミステリー作品だが,陳はその語り手にこう言わせている――「たいていの研究は,現実から遠くかけはなれたものになっていた。時局の緊迫を考えると,私たちのやっているインド語やペルシャ語,あるいはイスラム教の研究などは,まったく迂遠きわまるものといってよい。日本軍はインパールで惨敗を喫し,インドへ兵を進めるなど,はかない夢となってしまった」[34]。そうした状況下,陳は書物のなかで自らをユーラシア大陸に遊ばせていたのである。

もっとも回想によれば,戦中期,実際に大陸へ渡ろうと考えたこともあったという。彼がまだ研究所に入る前,大阪外語の卒業を間近に控えたころのことだった。

> 昭和十八年,私はその年の九月に予定された繰り上げ卒業後の身のふり方に悩んでいた。毎日,地図をひろげた。日本は大陸で戦い,中国の抗戦基地は重慶と延安であった。大陸の周辺部はあんがい風通しがよい。山川沼沢などがなく,朔風のようにさっとどこへでも舞って行けそうな気がする。北京などはその周辺部に近い。命のしるしはこの一瞬。私はまず北京へ行き,そこを踏み台にしようと,少年らしく考えた。同期にA君という友人がいた。大陸でアルバイトをして学資を貯めてから進学した学生である。代返を頼んでも,イヤな顔一つみせず,こころよく引受けてくれた頼もしい友人だ。この友人に相談すると,北京回教協会のM氏に,会で働きたいと申し込んだらどうか,と知恵をつけてくれた。M氏は信仰心の厚い日本人回教徒である。だが,私の手紙に浮薄なところがあったのか,腰かけ就職の魂胆を見破られたのか,
>
> ――こちらは,なかなかじみな仕事ですから,考え直しなさい。
>
> という丁重な返事をもらった[35]。

このエピソードは「自伝的小説」として書かれた『青雲の軸』(1970－72)でも使われている。

> 「ぼくらは若すぎて,自分の力を大きく見すぎているようだね。……ぼくもそうだったよ。卒業したら,北京へ渡って,そこから張家口,包頭を通って,重慶政権の支配下にある甘粛へ行くつもりだった」
>
> 「カンシュク?　なんだい,それは?」
>
> 「地名だよ。中国でも回教徒の多いところでね。……ぼくはアラビア語もちょっとやったものだから,回教のことはなんでもわかっているつもりだった。そして,中国の回教徒をうごかそうと思っていた」
>
> 「うごかして,何をするんだい?」
>
> 「それが自分でもわからない。若いうちに,じたばたしてもはじまらないと,ある人に叱られて,それでやめてしまった」

俊仁はほんとうのことを言っていたのだ。

日本人の回教徒で，北京で回教関係の仕事をしていた三田という人に，そんな計画を手紙に書いて送ったことがある。俊仁の言うことが漠然としすぎていたのか，その人はたしなめるような口ぶりの返事を寄越した。無軌道な計画に，あきれたのにちがいない。ともかく，俊仁はあきらめて，助手として母校に残ることにしたのである[36]。

引用前者には「少年らしく」とあり，後者にも「漠然としすぎていた」や「無軌道な計画」とあるように，おそらくロマンチックな夢想に近い計画だったのだろう。それをたしなめた「M氏」あるいは「三田という人」は，当時北京で中国回教総聯合会の顧問をしていた（後年『クルアーン』の日本語訳を行ったことでも知られる）三田了一（ムスリム名オマル，1892－1983）だと思われる。陳青年の計画は実現しなかったが，こうした行動には，彼がユーラシア世界やイスラム世界に抱いていた漠然とした憧れが作用していたとは言えるだろう。

他方，陳は同じころ，書物や大陸行の夢のなかだけでなく，自分が暮らす街にも再びイスラム世界を見出していた。モスクやそこに集うムスリムである。はじめて街頭でタタール人児童と接したころ，陳が彼らの素性をよく理解していなかったことはすでに述べた。しかし，外語時代になると当然，在神タタール人をそれと認識しており，ときに神戸モスクを訪問することもあったという。『道半ば』に，

神戸には回教寺院があり，よく訪問してはイスラムの雰囲気にふれた。京都の鈴木富三郎さんと行ったことを思い出す。卒業直前であったと思う。京都の鈴木さんの家へは土曜日に行き，河原町のカトリック教会のミサも見学した。鈴木さんの家は敬虔なカトリックの信者であった。回教寺院やカトリック教会へ通ったことは，学問とロマンチシズムの混じった空気があったようだ。回教寺院にはトルコ・タタールの子供のための学校も付設され，アラビア語でコーランを教えていた。ダシュキさんという美しい女性が，そこの先生であった。(112－113頁)[37]

と書かれているように，モスクだけでなく附属学校のイスラム教育も見学していた。モスク訪問の動機を，「学問とロマンチシズムの混じった空気」と述懐しているが，これには先に見たユーラシア世界への関心と通底するものが感じられる。

陳は「トルコ民族の足跡を追う」(1984）というエッセイでも，「神戸の回教寺院」について「戦時中，私はよく訪れたが，寺院に付設されているトルコ人小学校を見学したこともある。そこではアラビア文字によるトルコ語教育がおこなわれていた」と述べており[38]，エッセイの主題も関係するのだろうが，宗教よりもむしろ民族的要素に目を向けている。また月刊誌『神戸っ子』(1968年１月号)に掲載されたエッセイでは，モスクの附属学校に関して，「戦争中，トルコ語学習を口実に私はよく訪ねた。ダシキさんという東京白百合高女出の，ものすごい美人の先生がいたのだ」と書いている[39]。ここにも出てくる「ダシキ」先生は，おそらくアリー・ダシキーという人物の娘だと思われる。アリー・ダシキーは，もともとイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会の東京支部長をしていて神戸のタタール人と関係がよく，1941（昭和16）年３月に東京から神戸へ移ってきた人である[40]。のちに陳の小説作品に登場することになるタタール人女性には，この「ダシキ」先生の面影が宿っているのかしれない。

以上，主として青年時代までの陳舜臣とイスラム世界とのかかわりを見てきた。陳の青年時代は戦争や戦後の混乱期と重なっており，そのなかでのイスラムとの出会いであった。夢想的

な大陸渡航計画や西南亜細亜語研究所での仕事を思えば，当時の回教政策とまったく無縁だったとまでは言えないかもしれない。しかし，実質的には陳にそうした政治的関心はなかった。出自や当時の年齢の影響も大きかったことは容易に想像できるが，結局は本人がいう「学問とロマンチシズムの混じった空気」こそが，イスラム世界に対する彼の関心のあり方を集約しているように思われる。

自由に旅行ができる時代ではなかったので，基本的には語学や文学，歴史書を通じてのイスラム世界との出会いだった。だが，それだけではない。自分と同じように異邦人として神戸に暮らすムスリムがいた。のちに自作にタタール人を登場させることを考えると，限られた範囲だったかもしれないが，彼らとじかに接した体験は貴重だったはずである。

陳が実際に西域，中央アジア，中東などを訪れることができるようになったのは戦後，作家になってからのことである。「年譜」によると，1972（昭和47）年に日中国交正常化がなされると，その直後に中国を初訪問し，翌年はじめて西域に旅行している（このときに中華人民共和国の国籍を取得したため，以後，台湾に入れなくなったという）。それからのち，陳はしばしば西域から中東にいたるまでの地域を訪れるようになるが，彼にとって特に重要だったのは，テレビ番組『NHK特集 シルクロード』への参加だったようである。この番組は1980（昭和55）年４月から翌年３月にかけて放送され，喜多郎（1953－）が作曲したテーマ曲の人気とあいまって，当時いわゆる「シルクロード・ブーム」を巻き起こした。その後も続篇が制作されることになるが，陳は1979（昭和54）年から，その録画のために「シルクロード」各地を訪問しただけでなく，関連の書物やエッセイなどを数多く発表することになった。1985（昭和60）年には，これによって日本放送協会の放送文化賞を受けている。

こうして実際に外国を訪れた経験が，やがて創作にも活かされることになる。ただ陳には，それに先立つ，青年時代からの学術的な読書や神戸でのタタール人その他さまざまな外国人との長年にわたるつきあいがあった。その二つが結合することによって，陳舜臣独特とも言える広がりをもった小説世界が生まれた。以下，関連する陳の三つの小説作品を発表年順に見ていくが，特に最後に扱う『相思青花』（1984－85）は，いま述べたような経験の結合から生まれた大作と言うことができるだろう。

４．『他人の鍵』（1969）

長篇小説『他人の鍵』は，1969（昭和44）年６月，『別冊文藝春秋』第108号に掲載され，同年中に単行本として刊行された[41]。雑誌初出時の目次に「“外人長屋”に乱舞する国籍喪失の男女群像」とあるように，一種の群像劇である。人物ごとに描写の濃淡はあるものの，絶対的な中心人物は置かれていない。殺人事件をめぐる推理小説だが，作中人物のうちの誰かが事件の謎を完全に解くわけではない。捜査にあたる警察官でさえ，事件の全貌を知るにいたらない。それを知るのはひとり犯人のみであったが，犯人もまた誤解を抱いたまま自殺してしまう。ただ読者だけが――全知の語り手の言葉をとおして――すべての事実を知ることができる。つまり，名探偵の推理を楽しむ作品ではない。むしろ，各登場人物の劇的な人生や家族関係を描くことに重点が置かれた作品かもしれない。

舞台は，戦後一年ほど経った1946（昭和21）年秋ごろの神戸である。山手にある北野町の，奇跡的に空襲を逃れて焼け残った一画に「外人長屋」がある。北野町と言えば裕福な外国人が瀟洒な洋館に住んでいるイメージがあるが，「下宿屋のつもりで建てられたこの外人長屋にすむのは，いわば一般外人のレベルから，はみ出したような人たち」（446頁）だった[42]。

おもな登場人物はこの長屋に住む若者たちで，さまざまな事情から神戸にやってきたよそ者家族の第二世代にあたる。みな神戸で育った

幼なじみである。しかし，語り手は，彼らの親交だけでなく，一人一人の人生の独立性にも力点を置く。各登場人物に順番に焦点を合わせながら，彼らとその家族が抱える個別の悩みや問題を語る。その背後には，近代における各民族や国家の歴史が横たわっている。語り手はまた，彼らの内面を覗きこみながら，殺人事件をめぐる各人の推理や思惑のすれ違いを明かしていく。一方ではよそ者たちが神戸で育んだ友情を描きつつ，他方では彼らがルーツを共有しない寄せ集め集団であることを強調する。登場人物自身にも，「ぼくらはばらばらやね。そのばらばらなところが，ぼくらの特徴みたいだな」(486頁）と，その集団としての性格を要約させている。

この「外人長屋」の住民として，まず，日本人の父と白系ロシア人の母のあいだに生まれた日本国籍の織雅（オリガ）がいる。すでに両親を亡くして天涯孤独の身だが，22歳と若く，美しい。長屋の若い男性はみな彼女に心を寄せている。日本人の隆夫は南洋から復員してきたところで，出生に秘密を抱えながら，血のつながらない母親と二人で暮らしている。この二人は長崎の五島列島出身で，母親は長屋の管理人として働いている。ポルトガル人のマルセリーノは父と二人で暮らしている。父親は若い頃に世界を遍歴し，ゴア，ティモール，マカオというふうにポルトガル領をつたって神戸にやってきた。そこでイタリア人女性と結婚し，生まれたのがマルセリーノである。「ポルトガルが第二次大戦で中立を守ったおかげで，戦争中も彼は英米系の外人のように自由を束縛されることなく，外人長屋に住みつづけることができた」(452頁)。しかし彼らは，国籍をもっていても実際には故国と縁の切れた根無し草として描かれる。広東料理のコックの息子，張彰仁は織雅と同い年である。性格温厚で，若者のなかでは一番目立たない。華僑の彼は中国と日本のはざまに生きる人物であり，ある程度まで作者の分身とも言える。

こうした面々――ほかに戦後に入居してきた白系ロシア人家庭もあるが――に混じって，「トルコタタール」であるアリー・バヤルと妹のファティマ，そして両親が暮らしている。特に第8章がバヤル家の家庭事情の説明にあてられている。その冒頭に「バヤル家は最近，一家の運命にかかわる重大な問題をかかえている」(455頁）とある。これはトルコ共和国の国籍を取得してそこへ移住するかどうかという問題である。

小説としてはやや説明的にすぎるように思われるこの章では，語り手がタタール人の来神事情を詳しく語る。「彼らは人種的にはトルコ族だが，トルコ共和国の国民ではない。ソ連領ウラル地方に住んでいたトルコタタールと呼ばれる種族の人たちである」（455－456頁）と一般読者の誤解を避ける説明をした後，彼らの民族的起源，亡命地日本での厳しい生活，東京と神戸のモスク建設，モスク附属学校でのイスラム教育や民族教育，羅紗行商の様子などについて詳しく述べる。

そうした背景説明のあと，語り手は国籍問題（ソ連やトルコ共和国による国籍附与の呼びかけなど）の話題に移り，そこからアリー父子の会話へとつなげていく。ロシア革命以降の亡命地での無国籍状態について，父親はこう嘆く。

> とにかく，わしはこんな居候みたいな，宿かり生活にうんざりしている。いろんなカードに国籍をかく欄がある。ホテルに泊っても，ちょっとした契約をするにも，そいつがあるじゃないか。そこにstatelessと書かにゃならん悲しさ，そんなものは，もう二度と味わいたくないんだ。(459頁)

マルセリーノや張ですら帰る国はあるが，タタール人にはそもそも「帰るべき国がなかった」(459頁)。トルコといえども本当の故地ではない。それでも父親はこう言う――「わしらがトルコに生活の基盤をもっていないのはたしかだ。それなら，これからそれをつくろうじゃな

いか。……日本にだって，わしらはほんとうの生活の根のようなものをもっていたかな？」(458頁)。彼らにとって日本は，結局のところ，仮の住まいだった。根を生やそうにもコミュニティの規模が小さすぎて，それを維持するのが難しい事情もあった。この関連では，子供たち，とくに女性の結婚問題についても触れられており，ムスリムの結婚相手を見つけることの難しさが親子の話題になっている（458頁）。そこで父親は，「身を寄せ合って，この小さなサークルをかためてみたって，けっきょく，海の表面の泡みたいなものだ。いまにパチンと消えてしまう。それなら，いっそ，泡をやめて海になろうじゃないか」（458頁）と，トルコ共和国への移住をうながすのである。日本生まれの息子アリーにとっては，父が言うほど移住は簡単な問題ではない。しかし，彼にも「父の言うことは，いちいち心にしみとおるように」（458頁）よくわかる。

父親はまた「まやかしだらけ」の生活ではなく「本ものの生活がしたい」とも言う（457頁）。「まやかし」は羅紗の行商と結びついている。彼らは来日後，「栗色の髪，高い鼻，青みがかった眼という容貌を利用して，日本製のラシャを舶来品にみせかけ売りつける商売」をしてきたのだが，「戦後も，その容貌を看板に，進駐軍関係者にみせかけるようにして，なんとか生活を維持している」状態である（457頁）。ここで強調されているのは経済的問題よりもむしろ，アイデンティティや自尊心の問題である。「根無し草」や「国籍」問題は，後で取り上げる作品でも執拗に繰り返されるテーマだが，そこにはもちろん，陳自身が自らの人生で味わった苦い思いが反映しているのであろう。

ただし作者は，あくまで国籍にこだわるバヤル一家に対して，反対の立場をとる人物も登場させている。マルセリーノである。彼はポルトガル国籍を有してはいるものの，父の代から故国とはすっかり縁が切れた根無し草として描かれている。皮肉屋の彼は「国籍なんて，ふるくさいことや」（483頁）と言い放ち，アリーに挑戦する。このときはファティマに「あんたがstatelessとちがうから，国籍のことがわからんのよ。それを持ってない人にとってどんなものかね」（484頁）と反論を受けているが，作者はあえてこうした議論を中途で終わらせている。無国籍状態が引き起こす不便益を考えればマルセリーノの言葉は現実的ではない。しかし，作者がのちに「国というものに対する思いも，ずいぶんと変わって」，「世界は同じだ，という気持ちのほうが強く」なり，「民族国家」に否定的な考えを持つにいたったことを思い起こせば[43]，こうした箇所も，バヤル一家の立場を擁護するためだけに用意された場面だと簡単には言い切れない。ナショナリズムに対する解毒剤としてのマルセリーノの役割を指摘することもできる。

上述のごとく，若者同士は幼なじみの友情で結ばれているが，各家族の出自はばらばらで，共同体としては一時的なものにすぎない。この物語は，火災によって「外人長屋」が崩れ落ちる場面で終わっていて，殺人事件にまつわるさまざまな秘密を火が永遠に飲み込んでしまう仕掛けになっているが，それは同時によそ者たちの共同体のもろさを象徴的に表してもいる。物語最後の部分を引用する。

> 「ど，ど，ど……と，瓦が左右から，折れた梁を追うように，雪崩れ落ちた。ほかの梁や柱も，つぎつぎに折れたり倒れたりする。
>
> 音は一としきりつづいた。
>
> 織雅の胸のなかにその音が，彼女のわからない広東語やトルコ語やポルトガル語をまきこんで，すさまじい勢いでこだました。
>
> 永遠につづくかと思われるほど，そのこだまはながく尾を曳いた。(543頁)

この直前，現場に駆けつけた住人たちが家族ごとに固まって会話を交わす場面がある。全知の

語り手が織雅に寄り添いながらその様子を描写する。しかし，それぞれの家族がそれぞれの言語で話していて，織雅には理解できない。小さな共同体の分断状態があらためて言語的に表現されている。ただ，語り手が読者のために広東語や「トルコ語」を通訳してくれる。そのときアリーは「やっぱり，トルコに帰ったほうがよさそうだな」と漏らすのである（542頁）。

『他人の鍵』は，陳舜臣が自作のなかに初めて本格的に神戸のタタール人を登場させた作品である。作品が発表されたのは1969（昭和44）年だから，物語の設定年代とのあいだには20年以上のずれがある。戦前から終戦直後の一時期，よそ者たちが神戸につくりあげた小さな国際共同体を，おそらく自身の思い出も利用しながら，時代への郷愁とともに描き出したのだろう。若者たちが相談事をするときに集まる店はお好み焼き屋「桃太郎」である。中華料理のコックをしている張の父親にそこまで料理をもってきてもらう際，アリーが張に「おやじさんに，明日の料理，豚肉なしでやってもらうように言ってほしいんだ」（450頁）と言う。この場面は，陳が語るタタール人児童との出会いを思い起こさせる。部分的ではあれ，おそらくそうした実体験が利用されているのだろう。もちろん，体験的知識だけでなく，書物による知識もあっただろうし，在神タタール人に取材した可能性もある。いずれにせよ，本作を読むと，作者が在神タタール人に関してかなりの知識を有していたことがわかる。

ただし，この作品はあくまでフィクションである。そのなかでは作者特有の関心やビジョンに沿った物語構築がなされている。たとえば，大きく取り上げられているトルコへの移住や国籍のテーマについても，これが当時の在神タタール人の一般的状況を写しとったものかどうかはわからない。戦前から神戸に住んでいたタタール人（トルコ国籍）の故キルキー氏（Ferid Kilki, 1927－2013）によると，多くの在神タタール人が日本を去ったのは1970年代前半だったという[44]。この作品が発表された時点では，まだ在神タタール人コミュニティも消滅してはいなかったわけだが，作中にはバヤル家以外のタタール人は登場せず，コミュニティ内にもいろいろな家族がいた点には触れられていない。

もちろん，陳が示唆しているように，すでに日本を去ったタタール人も大勢いた。たとえば『アサヒグラフ』1955年11月16日号に，神戸港からトルコに向けて出国してゆくタタール人の特集記事「さまよえるトルコ人」（8－9頁）が掲載されている[45]。

> この頃は神戸から便船が出る毎にトルコ人たちが母国に引揚げてゆく。五〇年前，第一次世界大戦の難民として日本に辿りつき，洋服生地の行商で命をつないできた彼らは，神戸在住者だけでも五〇世帯余り。もうほとんど日本化して日本を祖国として考えるほどになった彼らを，母国へ駆りたてるものは単なる郷愁ではない。五〇年を経過した日本の経済状態が行商という稼業に行詰りをもたらしたからである。その上最近はトルコの政局が安定し，知識や技術が歓迎されるというので，「日本で鍛えた勤勉と技術でなら……」と引揚げが急速に高まり始めたのだ。〔後略〕

こうした事実に鑑みれば，『他人の鍵』に描かれたバヤル一家のトルコ移住計画もリアリティをもって受け止められるかもしれない。しかし，一般に戦後の在日タタール人へのトルコ国籍附与は朝鮮戦争後の1953（昭和28）年以降に行われたことが知られている[46]。『アサヒグラフ』の記事もそうした動きのなかで生じた移住を報じている。個々のケースにはこれにあてはまらないものもあったかもしれないが，上記のような時間的ずれによって，作品に描かれた出来事と実際の歴史とのあいだに齟齬が生まれている可能性はあるだろう。

つけ加えると，戦後のタタール人の移住先は

トルコ共和国だけではなかった。神戸在住者の場合は，米国（とくに西海岸）へ渡った人も多い。戦後すぐに（本作の織雅が夢みたように）米軍人と結婚して渡米した女性たちもいる[47]。実数は不明だが，上記キルキー氏によれば，半数はトルコに，半数はアメリカに（少数はオーストラリアに）移住したという。したがって，実際にはトルコ国籍取得が唯一の道というわけではなく，コミュニティ内に多様性があった（二重国籍者もいた）のだが，本作では，民族的アイデンティティというテーマとの関連から，トルコ移住者に選択的にスポットライトが当てられた格好になっている。またその際，トルコ共和国といえどもタタール人にとっては父祖が住んできた土地ではないことが説明されると同時に，それでもアリーの口から「トルコに帰ったほうがよさそうだな」（傍点引用者）と言わせている。こういった箇所には，台湾と中国（と神戸）に並行的に祖国や故郷を見出してきた陳ならではの感覚が働いているのかもしれない。

最後に，タタール人以外のムスリムが登場しない点も指摘しておこう。たとえば，第８章冒頭付近に以下のような箇所がある。

> おなじトルコタタールの亡命者でも，抜け目のない連中は，相当な産を成した。彼らは東京と神戸に回教寺院を建て，小規模ながら学校をそのなかに付設し，アラビア文字を使った自分たちのことばを，子弟に教えた。アリーも，その学校でコーランを習い，民族教育を受けたのである。（456頁）

この書き方だと，日本で財産をつくったタタール人が中心となって東京と神戸のモスクを建設したように読める。もちろん，タタール人もできるかぎりの貢献を行ったことはたしかだが，モスクの建設資金に関しては，東京では日本側から，神戸では国内外の英領インド人からの寄附が主要な財源であった[48]。作者の経歴を考えると，特に神戸モスクに関する事情はよく知っていたと思われるので，ここでインド人に対する言及がないのは，ある意味で不思議である。モスク附属学校に言及し，そこでアリーが宗教･民族教育を受けたことになっているのは，かつてその学校を「よく訪問」した経験が生かされているのだろう。この学校は基本的にタタール人生徒ばかりだったので，そうしたことがインド人の不在につながっている可能性はあるかもしれない。いずれにせよ，神戸のムスリムといえばタタール人という設定は，これ以降に発表される陳作品にも引き継がれていくことになった。

５．『青雲の軸』（1970－72）

『青雲の軸』は第一部と第二部に分かれている。もともと，前者が『青雲の軸』という題で，大学受験雑誌『螢雪時代』の1970（昭和45）年10月号から翌年３月号まで連載され，後者は『続青雲の軸』という題で，同誌の1971（昭和46）年10月号から翌年３月号まで連載されたものである。それが1974（昭和49）年に『青雲の軸』という題でまとめられ，旺文社文庫の一冊として刊行された[49]。

雑誌連載は「作家に自分の青春を語らせるという企画」だったらしく[50]，「もともとは，受験生を励ますようなものをと言われ」て執筆したという[51]。しかし書きあぐねたすえに，「自伝小説だからペンが進まないのだとみきわめ，それなら，自伝的小説を書こうと考えた」（361頁，傍点原文）と，語り手が「序章」で述べている。「自伝小説」よりもさらに自由に書いたということになる。とはいえ，主人公「陳俊仁」は，「大正十三年生まれの四十六歳である。日本語で小説を書く中国籍作家。神戸が出生地であり，故郷は台湾なのだ」（361頁）というように，作者とまったく同じ属性を附与されている。後年，陳は「「青雲の軸」に書いたことの大半は本当のことです」と語っており[52]，物語の大筋は，やはり彼自身の人生体験に基づくものと考えてよい。

連載事情や作品名からもわかるように,『青雲の軸』は青春小説であり,主人公の悩みや成長を描いた一種の教養小説と言える。扱われている時代は主人公の誕生から日本の敗戦までで,最後は陳俊仁が玉音放送を聞き,「新しい時代の幕がひらいたのだ」(495頁)と感じるところで終わっている。

第一部には主人公が大阪外語に入学するまでのことが書かれている。台湾出身の家族が神戸に住むことになった経緯,家族のこと,日本語と台湾語,学校での様子などが語られる。中核に据えられているのは,主人公のアイデンティティの問題である。「神戸は外国人が多くて,いじめられた記憶もない。ただ,幼いころから小さな差別がそこかしこにあったのは感じていた」[53]という陳は,『青雲の軸』のなかで,そうした痛みをともなう子供時代の経験をいくつか書いている。中国服を着た祖父と一緒に植木市をのぞいた折に「チャンコロには売らへん」「早よ去(い)にやがれ!」(375頁)などと心無い言葉を投げかけられたこと。神戸港で行われる海軍の観艦式を楽しみにしていたところが,前日に学校で「台湾,朝鮮と,植民地出身の生徒ばかり」(388頁)が集められ,配属将校から翌日の行動を制限されたときの「哀し」みと「恥ずかし」さ(389頁)。日中戦争開始後の教室では,「支那人」という言葉が教師の口からもれたとき,級友たちの目が主人公に集まる。

> ――陳は支那人じゃない。台湾は日本領だから日本人だぞ。支那人じゃない。
> と,たしなめるように言った。
> 俊仁は真っ赤になって,うつむいた。
> 支那人じゃない,と二度もくり返したが,それだけ,支那人であることが罪悪であるような響きがした。
> 教師は俊仁をかばうために,好意でそう言ったのである。それはよくわかっていた。だが,俊仁の胸に渦巻いたはげしい反発は,けっして子どもじみたものではなかった。
> 人を奮い起たせるには,屈辱の味をなめさせるのが最も効果がある。
> (支那人がなぜいけないんだ?)と,俊仁は心のなかでくり返していた。それがいつのまにか,
> (おれは支那人だ!)という叫びにかわった。(394頁)

やがて,彼は大阪外語の印度語を志望するのだが,それは「使用人口が多いからだけではなく,インドが英領の植民地であるということが,稲妻のように彼の頭にひらめいたから」だった(425頁)。「おれとインド人を結ぶのは,どちらも植民地の人間であるという事実なんだ。この強烈な事実のつながりなんだ」(433頁)という言葉も出てくるように,植民地人としての連帯意識が働いたのである。

第二部では,この大阪外語入学以後の生活が描かれる。興味深いのは,主人公が神戸で出会う友人として,インド人の兄妹と「トルコ人」の少女を登場させていることである。彼らは,主人公が自分の境遇を考える上での鏡のような役割を果たす。一方は解放されるべき祖国をもつ植民地人で,もう一方は「無国籍」という境遇である。「みんな神戸に来てるわね,エトランゼで。……そやけど,みんなこっちに来た事情がちがうんやわ」(445頁)とか「よそ者同士が,ここに集まった」(448頁)という状況は,『他人の鍵』と同じである。

ボンベイ出身でイギリス風の名前をもつインド人のジョンとメリーは,父親がインド人で,母親がイギリス人のキリスト教徒という設定で,生まれたときから二つの民族・祖国のあいだで引き裂かれている。「インド人になりたい」(448頁)と考えている妹に対し,兄は最初親英派であり,「インドに帰るつもりはな」く,「イギリスへ行きたがって」(450頁)いた。はじめて彼に会ったとき,陳俊仁は「外国の植民地になっているから,進歩の道がふさがれて」おり,「もろもろの「悪」は「植民地」であることに

由来する」と考えるが，ジョンは「イギリスの植民地になっているから，インドはこのていどですんでいるんです」(437頁）とイギリスの立場に同化していた。ところが彼は，ある「失恋」体験によって，「自分がインド人でしかないということ」(454頁）を思い知るにいたる。

> その結果，ジョンの前には，二つの道がひらかれた。インド人であるという運命を呪う道と，インド人であることにめざめる道と。
>
> めざめの道を，彼はえらんだ。(455頁)

ナショナリストとなったジョンは，戦時下の日本にとどまり，日本の対アジア政策には距離を置きながらも，チャンドラ・ボースに感化され，インド国民軍に参加するためシンガポールへ渡航することまで考えるようになる（しかし，この計画は先に引用した主人公の甘粛渡航計画と同様，空中楼閣にすぎない)。

こうした文脈のなか，主人公のもう一人の対話相手としてタタール人少女アスタが登場する。「半袖の白いブラウスに，紺のスカートという，さっぱりした身なりだった。髪は栗色で，訴えるような黒い瞳は，深淵のように底知れないかんじである」(444頁）とは，初めて彼女に会ったときに俊仁が抱いた印象である。「アスタの家は，トーアロードの東，回教寺院からすこし南にさがった路地に」(444頁）あり，彼女はそこに姉と二人で住んでいる。二人が裕福でないことは，次のような文章からもうかがえる――「目立たない家である。グリーンのオイルペンキを塗った下見板張りの壁には，全面に亀裂がはいっていて，ところどころが剥がれていた。古ぼけた，小さな木造の洋館であるが，なかにはいると，あんがいひろびととしたかんじであった」(444頁)。これも『他人の鍵』の「外人長屋」を思い出させる。

アスタの登場場面は「グッド・ラック」と題する章（444－449頁）にほぼ集中している。そこでは，来日事情や羅紗行商のやり方など，『他人の鍵』とほとんど同じようなタタール人についての背景説明が（メリーによって）なされる。そのあいだに俊仁とアスタの対話がはさまれ，二人の境遇の違いが強調される。商売で日本にきた陳一家に対し，「あたしたちはちがいます。国を追われて来ました。それも，もともと自分のものでない国ですが」(445頁）とアスタは説明する。この言葉が理解できない俊仁は「白系ロシア人とおなじやね」と言うが，「ちがう。やっぱりちがうわ」(446頁）という答えが返ってくる。俊仁がさらに「じゃ，どうして，ほんとのトルコの国へ帰らなかったの？」と訊ねると，アスタは，第一次世界大戦でオスマン帝国が敗戦国になったことや政治的腐敗があったこと，商売で縁のあった満洲のほうが安定していると思ったこと，共和国以降のトルコが自分たちを受け入れてくれるかどうか不安だったことを述べ，さらにアラビア文字の廃止などに触れて，「その変わり方があんまり大きいので，あたしたち，心の祖国が，まただんだんと遠のいて行く気がするんですよ」(447頁）と答えている。

こうした立場は，戦中と戦後という時代設定の差もあって，『他人の鍵』に描かれたバヤル一家の立場とは微妙に異なっている。アスタの前にはまだトルコ国籍という選択肢はない。しかし，違いはそれくらいであって，基本的なタタール人の描き方は両作品で共通している。たとえば，対米英蘭開戦が近づいていたころ，兄のジョンが日本に残る決心をしたのでメリーは喜ぶのだが，それを眺めるアスタの表情に「一種の羨望らしいもの」を俊仁が読み取る場面がある。

> メリーはイギリス統治下とはいえ，そのために戦うべき祖国を持っている。それなのに，アスタといえば，外事課の書類の国籍欄に，
>
> Stateless――無国籍
>
> と書き込まねばならない。たいへんな屈

辱ではないか。(453頁)

この言葉は『他人の鍵』でアリーの父親が口にする「statelessと書かにゃならん悲しさ」にぴたりと重なる。

また，俊仁とメリーとアスタの三人がそれぞれの言語で次々に歌を歌う場面がある。普段の彼らの共通語は日本語である。「アスタは神戸生まれの神戸育ちだから，日本語を自由にしゃべる」(445頁)し，メリーもまた「見本にでもしたいようなさわやかな神戸弁」(443頁)を話す。しかしここでは，「ほとんどインド語を話せない」メリーがわずかに覚えているインド語の歌をうたい，「トルコ語と英語と日本語を，それぞれおなじ程度に話せた」アスタがトルコの歌をうたう。そして最後に俊仁が「台湾から来た受験生に教わった台湾の民謡をくちずさむ」(448頁)。三人が背負っているそれぞれ異なる民族的アイデンティティが言語をとおして表現される箇所であり，『他人の鍵』における多言語状況の描写と同様のことを作者は行っていると考えてよいだろう。

『他人の鍵』は推理小説であり，『青雲の軸』は「自伝的小説」である。ジャンルや筋は異なるが，戦中から終戦直後にかけての神戸を舞台に，そこで出会ったよそ者の若者同士の交流を描いている点，第二次世界大戦を契機とするアジア諸国民の民族的意識の転変や覚醒を描いている点，そしてそこに在神タタール人を絡めていく点などは共通しており，またそのタタール人の描き方も非常に似通っている。発表時期が前者は1969年，後者は1970－72年と近接しているので，それも自然ななりゆきと言えるのかもしれないが，無国籍タタール人のテーマは作者の気に入ったのだろう。このあと十年以上たってから，彼は小説作品のなかに再びタタール人を登場させることになるのである。

6．『相思青花』(1984－85)

前二作の物語が一部をのぞいてほとんど神戸を舞台としていたのに対し，『相思青花』は世界各地を舞台にしたスケールの大きな物語である。もとは1984(昭和59)年6月12日から翌年6月15日まで，一年あまりにわたって『新潟日報』に連載された小説(その後，他の地方紙にも掲載)で，連載当時の題名は『波の残影』だった。しかし「似たようなタイトルが，当時発表された他の作家の作品に」あったので，単行本刊行(1987)の際にそれが変更された[54]。

登場人物が多く，プロットもまたそれに見合って非常に複雑だが，稲畑耕一郎が言うように「物語の縦糸は，三十代半ばの神戸に住む美しい未亡人と五十歳になったばかりのシンガポール華僑の実業家とのラブロマンス」で「いわば熟年の，おとなの恋愛」とまとめることができるだろう[55]。これが縦糸だとすると，横糸は何になるだろうか。稲畑は特に述べていないが，それは清朝末期に生きたある中国人夫婦の純愛物語にまつわる陶磁器「相思青花」一式をめぐって展開するミステリー仕立てのドラマだと言うことができる。そこに，太平天国の乱，日中戦争やその前夜のスパイ合戦，第二次世界大戦，戦後の日本や中国の社会情勢，そして朝鮮戦争など，近代東アジアの歴史が重層的に絡んでくる。

別の表現をすれば，これは美術品の移動，離散と再集結の過程をめぐる物語と言うことができる。「青花」とは「染付」のことであり，「相思青花」は文字どおり「おたがいに想い合っている青いやきもの」(90頁)を意味する[56]。波濤文の壺や瓶(へい)や皿などからなるこの一揃いの焼き物が，歴史の激動のなかで散逸してしまう。しかし，偶然出会った現代の男女――日本人の奈美とシンガポールに住む華僑の林輝南(リンフエイナン)――がそれらの品々の背後にある物語に気づいてその数奇な運命を辿りなおす。やがて，それぞれのありかが判明し，ばらばらになっていたものがつながっていく。美術品の移動には一つ一つ物語があるが，この小説では，それが夫婦愛であったり，恋人同士の恋愛であったり，友愛の

物語であったりする。そして二人がそれらを辿っていく行程自体が彼らのあいだに育まれる愛の物語となる。

陳は陶磁その他の古美術品にも詳しい作家だった。直木賞受賞作「青玉獅子香炉」(1968)をはじめ,『漢古印縁起』(1978)や『景徳鎮からの贈り物――中国工匠伝』(1980)収録の諸篇など,すでに中国古美術品にまつわる数々の小説作品を発表していた。つまり,このテーマを自家薬籠中の物としていたのだが,そんな彼がそれまでにない空間的広がりのなかで美術品の移動やそれに関わる人々の人生を描いたのが『相思青花』である。神戸や京都を中心とする日本各地,上海や香港,重慶など中国の街々,シンガポール,インド,トルコ,イギリス,アメリカというふうに,物語は世界中に拡散していく。しかしそのすべてをここにまとめることは不可能であり,本稿の目的からしても必要ではないので,以下では在神タタール人に関わる部分のみを取り上げる。

この作品には「メフメット・エミン」と「ハリル」というタタール人夫婦が出てくる。端役ではなく,物語上重要な役割を果たす。特にメフメットには主要人物二人に次ぐ存在感がある。前二作との大きな違いは,彼らがすでに神戸を去り,トルコ国籍をとってイスタンブルに暮らしていることである。時代は1980年代初頭に設定されており,発表時期とほとんど時間的ずれがない。つまり,同時代の物語として書かれている。

物語は,半年前に未亡人となった奈美が一人旅の途中でイスタンブルのトプカプ宮殿を訪れている場面から始まる。その博物館にある世界的に知られた中国陶磁の膨大なコレクションを眺めているときに彼女は林輝南と出会う。神戸で生まれ育った林輝南は昭和18年に昭南(シンガポール)に渡り,そこで五年を過ごしてから昭和23年,18歳で占領下の神戸に戻った。そして大学を卒業した後,父の貿易業を手伝うようになった。今はシンガポールを拠点に仕事をしているが,しばしば日本を訪れている。

その林輝南の旧友が五歳ほど年長のメフメット・エミンである。二人の父親が満洲のハルビンで出会った友人同士だった。メフメットもハルビンで生まれているが,神戸のほうに長く住んだ。彼には美術の才能があったが,金に困っていたときにある日本人にそそのかされて,美術品を贋作するようになった。それが原因で訴訟に巻き込まれ,一騒動あったあと,「出直したほうが,きみのためにもいいのじゃないか」という林の忠告にしたがって「トルコへ帰る」ことに決めたのだった(350頁)。夫人のハリルとともに神戸を去ったのが1957(昭和32)年で,それ以来イスタンブルのバザールで骨董屋を営んでいる。

奈美は最初,まだ林の素性も知らぬまま,彼に教えられてメフメットの店に行く。そこでメフメットから初めて彼と林の関係を聞くのだが,英語で話していた彼が突然日本語を話し始めたことに驚く場面がある。

> そのあと,彼女にとって思いがけないことがおこった。それは,いままで,いささかたどたどしい英語でしゃべっていた相手が,とつぜん日本語を口にしたのである。「むかしの日本人はみなハルビンを知っていましたよ。だけど,あなたのように,戦後に生まれた人が知っているのは,たのもしいことですね」
>
> かたことではない。ことばの流れによどみもない。よく注意してきけば,抑揚をつけすぎているのが気になるていどである。すくなくとも,彼の英語よりはりっぱなのだ。(45頁)

「抑揚をつけすぎてい」たのは標準語で話そうとしたからで,このあと彼の言葉は「いつのまにか関西弁になって」いき,不自然さも消える(47頁)。こうして,日本からはるか遠くに離れたトルコで思いがけず日本語を流暢に操る華僑

や年配のトルコ人に出会い，しかもその二人が奈美の暮らす神戸で育った人物だったという驚きを読者は奈美と共有することになる。

しかし（林輝南はともかく），イスタンブルで日本を懐かしむトルコ人に出会うのは不自然ではない。実際によくあったことで，陳自身の体験でもあった。彼はこの作品が発表される少し前の1982年秋に，NHK「シルクロード」の取材で，はじめてイスタンブルを訪問した。二回目の訪問は1986年であるから，本作品の執筆以前に訪れたのは一回だけである[57]。このとき「現地のトルコ人夫妻が案内してくれ」，「作品に出てくるイスタンブールの各所は，全部見て回った」そうだが，案内してくれた夫人のほうが日本語を話した。「そのご主人のほうが亡くなったということを聞いて，一種の記念みたいな感じで書いた」のがこの作品だという[58]。

――日本語ができる人でしたか？
陳　夫人のほうがね。彼女は母親が日本人で，日本で生まれたんです。父親はトルコ・タタールの貴族の出で，帝政ロシアの西トルキスタンにいたんですが，ロシア革命の混乱期に彼を除いた一家全員が殺され，彼だけ中国側の東トルキスタン，今でいう新疆ウイグル自治区に逃れたんです。で，行商人みたいなのをやりながら，日本に流れてきた。そして，日本人女性と結婚し，彼女が生まれたわけです。
〔中略〕で，彼女もトルコ国籍を取り，父親の故郷ではないけれど，いわば故国に帰ったんです。
〔中略〕私がトルコに初めて行ったのは一九八二年のことですが，そのころイスタンブールやアンカラには物凄く日本語がうまい人がおりました。町を歩いていると，日本語で呼びかけられてね。ぼくはここにおったんやと。それは日本から帰った連中なんです[59]。

陳は別の対談でも「暫く前までは，よくイスタンブールの町を歩いていたら，非常に流暢な関西弁で話し掛けられたとかいうことが」あったと述べている[60]。おそらく神戸からやって来た人だったのだろう。神戸とイスタンブルという遠く隔たった街同士が陳の個人的体験のなかでタタール人によって繋がったこのとき，『相思青花』に組み込まれることになるプロットの一部はすでに陳の頭のなかで動き始めていたのかもしれない。

メフメットと知り合った奈美は彼の家に招かれ，そこでハリル夫人に会う。「目鼻立ちの整った女性」，「美男子ふうの美しい中年女性」というのが奈美の抱いた第一印象だった（54頁）。ハリルは神戸生まれで，後で林輝南から聞いたところでは，若いころは「周辺に波が立たないことはありえないだろう」ほど「あまりにも美しい」女性だったという（292頁）。「もともとタタールは教育熱心」ということもあったが，父親の方針もあり「東京の女子学園」（63－64頁）に入った。こうした設定は，陳のエッセイに出てくる神戸モスク附属学校の「東京白百合高女出の，ものすごい美人の先生」を思い起こさせる。

奈美が初めてハリルに会う「ハリルの家」と題された章は，前二作にあったのと同様の，来日タタール人の歴史がまとめて読者に紹介される章となっている。それはハリルと奈美のあいだで交わされる会話に沿ってなされていく。「これまでの奈美の先入観では，ボルガとトルコとは結びついていない」（58頁）というように，ここでの奈美の役割はハリルによる歴史講義を聞く生徒役でもあって，読者は彼女とともに，カザンから満洲経由で日本へ移動してきたタタール人たちの歴史，そして彼らが日本を去ってトルコへ移住するまでの戦後社会の暮らしについて一通りのことを学ぶのである。まさに「民族叙事詩」（65頁）というべきもので，日露戦争時の話，ハルビンでの生活，行商，無国籍をめぐる話，白系ロシア人との混同，神戸モスク

が空襲を生きのびたこと，日本の回教政策[61]，「戦勝国」トルコの国籍取得，朝鮮戦争後の日本経済の復興とタタール人の退場の始まりなど，前二作でも触れられた基本的な点を繰り返しつつ，さらに詳しい説明がなされている。メフメットと林輝南の出会いの話も含めて，後で奈美が「人間の運命を，世界的なスケールで考えさせられたのははじめてです。感動的な一日でした」(97頁）と林に書き送っているが，読者も同じような感懐に打たれるだろう。

このあと，物語の展開があってメフメットとハリルは20年以上離れていた日本を再訪する。その機会に，夫妻の若かりし頃の逸話が林輝南の口から奈美に語られ，戦後の在神タタール人の暮らしに別の角度から光が当てられる（「坂の下」章)。この神戸再訪は夫妻にとってたしかに「青春巡礼」(290頁）と言えるだろうが，同時に高度経済成長期を経た日本そして神戸の変貌ぶりの激しさにも言及がなされる。彼らの青春の地はすでに永久に失われ，思い出のなかにしか存在しない。「しばらく住んでみたいとおもう？」と尋ねる奈美に，ハリルが「いいえ，もうけっこう」「そんなにかんたんに慣れそうもないわ。あたしたち，イスタンブールの空気に，もうすっかりなじんでしまっています」(380頁）と答える場面では，あらためて，神戸のタタール人コミュニティの（事実上の）消滅が印象づけられる。

最後に，物語全体におけるメフメットとハリル夫妻のタタール人としての役割をまとめてみよう。まず，彼らによってイスタンブルを舞台にもってくることができ，同時にそこと神戸をつなぐことができる。イスタンブルは，中国陶器の膨大なコレクションや，またそうした陶器を扱う古美術商があるところであり，相思青花の謎を追うことになる奈美と林輝南が出会う場所としてふさわしい。次に，羅紗の行商人をしていたメフメットの父がハルビンで林の父親と知り合うことにより，相思青花の故地，中国とのつながりもできる。さらには林輝南自身が作者と同じく戦前から神戸に暮らした華僑で，同じ異郷に暮すよそ者仲間としてタタール人のメフメットたちが出てくる点も指摘できる。これは前二作と同じ役割，というより陳作品でおなじみの状況であるが，神戸の外国人＝よそ者たちがたどった数奇な運命――いかにしてそこに集まり，いかにしてそこから出ていったか――に興味をもつのは，台湾系華人であった陳としては当然のことだった――「私は華僑だけに限らず，その国，その土地に住む外国人というのに興味を持っているんです」[62]。陳の小説においては，いつもこうしたよそ者たちによって，

焼跡のなかの神戸モスク（神戸市編『写真集 神戸100年』神戸市、1989年、110－111頁）
「焼跡に胸を張って空を仰いでいるようなモスクをみて、あたしたちは涙を流したことをおぼえています」（『相思青花』、61頁）

神戸という小さな穴から世界を眺める手だてが読者に与えられる。この作品では，東アジアと西アジアをつなぐメフメットたちタタール人によって，それがより大きなスケールでなされていると言えるだろう。

7．むすび

言うまでもないことだが，陳の作品は戦後かなり時間が経ってから発表されたものである。在日ムスリムに関するものとしては，同時代の記録でも同時代の文学的表象でもない。もちろん，彼は実際に戦前・戦中・戦後とタタール人ムスリムに会ってきた。しかし，作中に書かれていること一つ一つについて，実体験の中で得た認識か，何らかの書物から得た知識か，あるいは執筆の際に関係者に取材したのかなど，情報源を特定することはできない。あくまで，事後的に行われた在日ムスリムの文学的表象であることは強調しておくべきであろう。この点をあらためて確認したうえで，最後にこれまでの内容をふり返って，陳舜臣における在日ムスリム表象の特徴を簡単に整理しておきたい。

まず明らかなのは，在日ムスリムとして登場するのがタタール人にかぎられていることである。英領インド人やアラブ人，そしてわずかながらイラン人のムスリムなども神戸には戦前からいた[63]。しかし，彼らは神戸を舞台とする陳作品には（少なくとも明確には）出てこないようである。アラブ人やとりわけイラン人は数が少なかったので，あまり接触する機会もなく，創作のなかで神戸と結びつかなかったのかもしれない。20世紀終盤になると，そうした人たちは増えたかもしれないが，陳が好んで書いたのは戦前から戦後しばらくまでの神戸である。ペルシア語世界に関する彼の造詣はもっぱら大陸を舞台にした歴史小説のほうに活かされた。

他方，比較的数の多かった在神インド人ムスリムが登場しないのは，陳の経歴を考えても意外の感がある。神戸モスクすら，ほとんどの場合，タタール人にのみ結びつけられて登場し，インド人に対する言及はない。その一方で，非ムスリムのインド人はいろいろな作品に出てくる。この理由は明らかでないが，在神インド人の大多数がヒンドゥ教徒であった事実や，幼少年期からモスクを訪問するようになるまでのタタール人ムスリムとの接触によって，陳のなかにそれぞれの鞏固なイメージがつくられたのかもしれない。彼が本格的にイスラムに興味を持ち始め，神戸モスクを訪問していた時期はちょうど戦中期で，英領インド系ムスリムの多くがインドへ帰国していた時期にあたる。タタール人はもともと在神ムスリム・コミュニティ内の最大集団であったが，戦中期や戦後しばらくのあいだ，彼らのプレゼンスが相対的にさらに高まっていた。この時期の神戸こそ，後年作家となった陳が好んで描いた神戸である。そう考えるとインド人ムスリムが出てこないのはある程度自然だと言えるかもしれない。

またこれは，宗教的側面よりも民族的側面に陳が強い関心を寄せていたことを示すものかもしれない。たとえば『青雲の軸』の場合，植民地状況やそれに関連するナショナリズム，そして文明論上の役割分担におけるバランスを実現するために，華僑である自分（の分身），ムスリムであるタタール人に対して，ムスリムでないインド人を置くほうが多様性という観点からも適切であっただろう。

そもそも，陳のイスラムに対する興味は総じていわゆる「イスラム史」や「イスラム文明」と呼ばれるものに対する興味であった。たしかに宗教としてのイスラムに言及することもあるが，それは多くの場合，豚肉に関する食物規定であるとか，結婚問題であるとか，『相思青花』に出てくる偶像崇拝の禁止と絵画の未発達に対する言及（54－55頁）であるとか，ややステレオタイプとも言える戒律的・表層的な部分であり，信仰としてのイスラムそのものにはあまり触れていない（『桃源郷』等に見られるスーフィズムへの関心は別にして）。

タタール人も，ムスリムとしての面よりはむ

しろタタール民族の一員としての面を描かれる。タタール人の来歴説明は作中で周到になされている。無論，学術的には記述が甘いとか，反対に小説としてはあまりにも説明的すぎるとかいう批判はありうるだろう。しかし，タタール人の歴史をここまで詳しく作中に取り入れた作家はあまりいない。

また彼の著作を読むと，民族の歴史という大きな物語だけでなく，在神タタール人事情にもよく通じていたことがわかる。細かい事実誤認が見つかることはあるものの[64]，細部をよく押さえている場合が多い。たとえば『青雲の軸』にアスタの疎開先が出てくるが，「有馬温泉へ行く途中の，大池」(488頁）と具体的な地名が書かれている。戦中期の大池にはタタール人が実際にいたが[65]，資料があまりないので，作品発表当時も今もそのことは一般にほとんど知られていない。在日タタール人に関する先駆的研究である鴨澤巌の論文に有馬のタタール人のことがわずかに触れられているが，『青雲の軸』のほうが10年ほど早い[66]。こうした小説のなかに在神タタール人の歴史の断片が刻まれているのは貴重なことであろう。

一方，個々のタタール人の描き方についてはどうか。陳はタタール人を男女とも描いているが，それほど特徴のある描写は見られない。民族的背景を詳しく書きこむ一方で，個々の人物造形がやや深みに欠けるうらみはあるかもしれない。ジェンダー表象という面でも，おおむね保守的で常識的な描き方，場合によっては紋切型とも言いうる表現にとどまっているように思われる。旧稿で取り上げた一部の作家のように完全なる他者として幻想やエロティシズムに満ちた表象を行うようなことはもちろんない。たしかに，モスク附属学校の女性教師やアスタ，ハリルなどの描き方を見ると，女性の表象には男性作家のエキゾチシズムが幾分か反映している部分もあるとは言える。とはいえ，それもきわめて控え目なものである。

陳の場合，それよりも重要なのは，やはり集合的な属性，男女に関係なく常にタタール人に与えられた「無国籍」という属性だろう。いわば国民国家システムの犠牲者としての在日タタール人像である。『相思青花』では，無国籍状態はすでに過去のものとなっているが，そのなかでもかつての苦労が描かれている。作者陳自身，敗戦によって日本国籍を失い，さらに中国国籍取得によって台湾から締め出され，最終的には日本国籍を取得（1990年）するにいたった作家である。『青雲の軸』には，アスタが発する「心の祖国」(447頁）という言葉に俊仁がこの上ない愛おしさを感じる場面が出てくる。自身が国籍問題を抱え，また国籍と重なるとはかぎらない「心の祖国」をいつも求めていたからこその，無国籍タタール人への共感と同情だったのだろう。

陳の描くタタール人には他の作家に見られるような強い他者感がない。逆に，「よそ者」同士の共感，親近感がタタール人と他の人物の関係を決定づけている。これは陳舜臣のタタール人表象の基本的特徴である。それを可能にしたのは，もちろん陳自身が台湾に出自を持つ「よそ者」であったことと，在神タタール人が陳と同じように日本語を自在に操ったことであろう。それぞれ異なる母語と民族的背景をもちながら，「よそ者」同士が日本語という共通語によって相互理解を深める。それをあらためて印象づける文章が各作品に挿入されている――「そこには三つのことばを母語とする人たちがいたが，日本語が共通の言語であった」(『相思青花』, 224頁)。言語的側面に意識的であるのは，いかにも外国語を専門に学んだ陳にふさわしい。また複数言語による隔絶を描きながらも，同時に日本語で結ばれた「よそ者」たちの共同体を描いたのは，台湾に出自を持つ神戸出身の日本語作家だったからこそであろう。タタール人は彼にとって，そうした共同体のメンバーなのである。(了)

＜注＞

⑴ 「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象（1）――東京・朝鮮篇」『アジア文化研究所研究年報』（東洋大学アジア文化研究所）第50号（2015），2016年，91（256）－69（278）頁；「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象（2）――神戸篇（前篇）」『アジア文化研究所研究年報』（東洋大学アジア文化研究所）第51号（2016），2017年，129（308）－108（329）頁。

⑵ 以下，単独作品名に続く丸括弧内には原則として初出年を，短篇集やエッセイ集の場合は単行本初刊年を挙げる。

⑶ 陳舜臣『神戸 わがふるさと』講談社，2003年，19頁。

⑷ 『クリコフの思い出』（新潮社，1986）に収録。

⑸ 以下，陳の経歴に関しては，宮本近志・芦沢孝作「年譜」陳舜臣『桃源郷』（陳舜臣中国ライブラリー30）集英社，2001年，747－834頁（以下「年譜」）も適宜参照した。

⑹ 「対談 陳舜臣／俵万智」陳舜臣『イスタンブール』（世界の都市の物語４）文藝春秋，1992年，附録「月報」，３－５頁。亀甲括弧内は引用者による補足（以下同様）。

⑺ 陳舜臣・陳錦墩『美味方丈記』中公文庫，2002年［改版］，84－85頁（初刊：毎日新聞社，1973年；初出：『サンデー毎日』1972年１－12月）。

⑻ 陳が通ったのは商業学校であるから，当時，正式には「中学校」ではなく「実業学校」の範疇に入る。

⑼ 同じエピソードは，陳舜臣「タブー再検討」（『曼陀羅の山――七福神の散歩道』集英社，2001年，34－39頁［初出：『毎日新聞』1998年５月３日］）にも見えるが，ここでは「遊び仲間のトルコ・タタルの少年」（34頁）としか述べられず，西洋人との混同については触れられていない。

⑽ 大阪外国語学校はその後，大阪外事専門学校（1944），大阪外国語大学（1949）を経て，2007年10月より大阪大学外国語学部。

⑾ 「インタビューⅢ「人に時あり」」陳舜臣編『陳舜臣読本　Who is 陳舜臣？』集英社，2003年，165－168頁（初出：1994年１月11，18，25日『朝日新聞』）；166頁。

⑿ 陳舜臣『道半ば』集英社，2003年，65頁；「年譜」，753頁。

⒀ 大阪外国語大学70年史編集委員会編『大阪外国語大学70年史』大阪外国語大学70年史刊行会，1992年，290頁。

⒁ 『大阪外国語大学70年史』，290－291，326－327，337－338頁。

⒂ サァディー『ゴレスターン』澤英三訳，岩波文庫，1951年。澤は詩人ハーフィズの作品やウマル・ハイヤームの『ルバーイーヤート』なども訳している（魚返善雄ほか訳『世界名詩集大成』18東洋篇，平凡社，1960年所収）。

⒃ 「序文」オマル・ハイヤーム・陳舜臣『ルバイヤート』集英社，2004年，５－11頁；５頁。

⒄ 上記註16を参照。

⒅ 『ルバイヤート』，９頁。

⒆ 『大阪外国語大学70年史』，86－87，292頁；『道半ば』，100－104頁。

⒇ 『ルバイヤート』５－６頁。ほかにハーフィズ（14c）の詩なども訳していたという（「年譜」，754頁）。

㉑ 『ルバイヤート』，６－７頁。

㉒ 陳舜臣「わが四行詩」『蘭におもう』六興出版，1977年，83-99頁；89-90頁（初出は『朝日新聞』1972年５－６月）。

㉓ 『道半ば』，109－111，303頁；『ルバイヤート』，７－８頁など。

㉔ 『ルバイヤート』，８頁。

㉕ 『道半ば』，308頁。「年譜」，758頁も参照。

㉖ 「［対談］自作の周辺――“大同”の世界をめざす人びと　陳舜臣VS稲畑耕一郎」『桃源郷』（陳舜臣中国ライブラリー30），集英社，2001年，733－746頁；741－742頁も参照。

㉗ 陳舜臣「詩人の墓」『六甲山房記』岩波書店，1987年，74－82頁；同『麒麟の志』朝日新聞社，1993年，77－80頁；同『天空の詩人 李白』講談社，2017年，146－147頁（もとは私家版として刊行された詩集『澄懐集』成瀬書房，1986年，全二

巻「甲子篇」および「乙丑篇」の後者に収録)。詩題や詩に添えられた読み下し文は書物によって多少の異同があるが，詩自体は同一。そのほか『風騒集』には，アラムートやペルセポリス，イスタンブルなどイラン・トルコの場所を題材にした詩作品が収録されている（『風騒集――陳舜臣詩歌選』平凡社，1984年，44－55頁）。

(28) 『敦煌の旅』(1976)，『シルクロードの旅』(1977)，『西域余聞』(1979)，『熱砂とまぼろし――シルクロード列伝』(1979)，『西域巡礼』(1980)，『三蔵法師の道――シルクロード紀行』(1980)，『録外録』(1984)，『シルクロード巡歴』(1985)，『シルクロード旅ノート』(1988) など。

(29) 「[対談] 自作の周辺――東と西のかけ橋となって　陳舜臣VS稲畑耕一郎」『イスタンブール』(陳舜臣中国ライブラリー26)，集英社，2001年，597－611頁；600－601頁。

(30) 「ヘディンと『シルクロード』――青春の一冊」『含笑花の木』二玄社，1989年，190－199頁。

(31) 同上，191頁。なお，この書物のスウェーデン語原著はStora Hästens Flykt（1935）だが，陳が読んだのはF. H. Lyonによる英訳（Big Horse's Flight, 1936）からの重訳である改造社版（小野忍訳，1938年)。

(32) 『大阪外国語大学70年史』，83－85頁。

(33) 陳舜臣『神戸というまち』至誠堂新書, 1965年, 208頁。

(34) 「三本松伝説」『三本松伝説』徳間書店, 1991年, 29－78頁。

(35) 「わが四行詩」『蘭におもう』，96-97頁。

(36) 陳舜臣『夢ざめの坂』(陳舜臣中国ライブラリー９）集英社，2001年，476頁。

(37) 「鈴木富三郎」氏は大阪外語時代の友人と思われる。

(38) 陳舜臣「トルコ民族の足跡を追う」江上波夫・陳舜臣・NHK取材班『騎馬・隊商の道――コーカサス・シリア・トルコ』（シルクロード　ローマへの道・第11巻)，日本放送出版協会，1984年，279－314頁；312－313頁。

(39) 「こうべろまん〈１〉回教寺院」(文＝陳舜臣，カメラ＝緒方しげを)『神戸っ子』1968年１月号，119－121頁；120頁。

(40) 内務省警保局編『外事警察概況』昭和11年版，186－187頁；昭和14年版，387頁等を参照

(41) 陳舜臣『他人の鍵』文藝春秋社，1969年。

(42) 以下，本作品の引用は『玉嶺よふたたび　柊の館』(陳舜臣全集第19巻，講談社，1987年）所収のテクスト（423－543頁）から行う。

(43) 「[対談] 自作の周辺――“大同”の世界をめざす人びと　陳舜臣VS稲畑耕一郎」『桃源郷』(陳舜臣中国ライブラリー30)，744－746頁。

(44) 筆者によるインタビュー（2005年６月16日，神戸)。

(45) この記事は東洋大学の三沢伸生先生に御教示いただいた。

(46) 鴨澤巌「在日タタール人についての記録（二)」法政大学文学部紀要29，1983年，223－302頁；松長昭『在日タタール人――歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』(ユーラシア・ブックレット134）東洋書店, 2009年, 59－60頁；三沢伸生「在日タタール人――転遷の歴史」小松久男編著『テュルクを知るための61章』(エリア・スタディーズ148）明石書店, 2016年, 343－347頁など。

(47) William Bacon, *Ed & Ivet: The True Story of a World War II POW Romance*, 2010.

(48) 拙稿「神戸モスク建立――昭和戦前期の在神ムスリムによる日本初のモスク建立事業」『アジア文化研究所研究年報』(東洋大学アジア文化研究所）第45号（2010年), 32（113）－51（94）頁。

(49) 初刊本は旺文社文庫，1974年。本稿での引用は陳舜臣『夢ざめの坂』(陳舜臣中国ライブラリー９）所収のテクスト（355－495頁）から行う。

(50) 「[対談] 自作の周辺――運命への自覚　陳舜臣VS稲畑耕一郎」『夢ざめの坂』(陳舜臣中国ライブラリー９)，635－650頁；637頁。

(51) 「インタビューⅢ「人に時あり」」『陳舜臣読本　Who is 陳舜臣？』，166頁。

(52) 同上。

(53) 同上。

(54) 「[対談] 恋愛小説と連載小説　陳舜臣VS稲畑

耕一郎」『相思青花』(陳舜臣中国ライブラリー8),集英社,2000年,525－538頁;527頁。

(55) 同上,528頁。

(56) 本作の引用は,註54の「陳舜臣中国ライブラリー」版から行う。

(57) 「年譜」,797,806頁。『陳舜臣読本 Who is 陳舜臣?』の第8章「世界 旅の記録」(291－301頁)も参照。

(58) 「[対談]恋愛小説と連載小説 陳舜臣VS稲畑耕一郎」『相思青花』(陳舜臣中国ライブラリー8),529頁。

(59) 同上,530頁。

(60) 「対談 陳舜臣/俵万智」陳舜臣『イスタンブール』附録「月報」,4頁。もちろん,関東からやって来たタタール人に出会った日本人旅行者も沢山いただろう。一例を挙げると,1970年にイスタンブルを訪れた生江義男は「流暢な日本語で話しかけてくる」「カザン生まれの白系トルコ人」に出会っている。「船頭小唄」など多くの戦前の流行歌を歌う彼の場合,「大正十三年から昭和十四年ころまで,東京,横浜,前橋,京城などに住」み,太平洋戦争前の昭和14年にトルコへやって来たのだという(生江義男『緑・砂・人――非西欧世界の幻想と現実』桐朋選書[桐朋教育研究所],1971年,232－234頁)。

(61) この話題は軽く触れられるにとどまる(62頁)。陳が描くタタール人たちは(実際に在神タタール人の多くがそうだったように)回教政策とはほぼ無縁である。

(62) 「[対談]恋愛小説と連載小説 陳舜臣VS稲畑耕一郎」『相思青花』(陳舜臣中国ライブラリー8),532頁。

(63) 拙稿「神戸モスク建立前史――昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成」『日本・イスラーム関係のデータベース構築――戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開』(平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書,研究代表者:臼杵陽[日本女子大学文学部]),21－62頁。

(64) たとえば『相思青花』では,神戸モスク建立年が1935年でなく「1936年」になっている(61頁)。

(65) 外務省記録(外交史料館)K.3.7.0.15「在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」第四巻収録「在留外國人名簿」。

(66) 鴨澤巌「在日タタール人についての記録(二)」,228頁。

(客員研究員/大阪大学大学院言語文化研究科講師)

Abstract

Literary Representation of Muslims in Japan during the Showa Period (3):

Works Set in Kobe (2) Chin Shunshin

FUKUDA Yoshiaki

This article is a sequel to my two earlier articles on the literary representation of Muslims in Japan during the Showa period. While the earlier articles each dealt with several writers, this article exclusively deals with works of the Taiwanese-Japanese writer Chin Shunshin (1924-2015). Chin was born in the city of Kobe and encountered Tatar children there in his youth. As he studied Hindustani and Persian at Osaka School of Foreign Languages he increased his interest in the Islamic world. He reminisces about his frequenting the Kobe mosque during the WWII. After the war, he made several visits to countries of the "Silk Road" and met in Istanbul some Turks of Tatar origin, who had lived in Japan until the aftermath of the war and spoke Japanese fluently. Chin wrote a lot of novels set in Kobe, some of which include Tatar characters. He drew attention to the "statelessness" of the Tatars and depicted them with sympathy and understanding. For him, Tatars were co-members of the community of strangers of Kobe who shared Japanese as the common language.